



| | |
|--------------|---|
| Title | ポー短編小説の一側面(1) |
| Author(s) | 松阪, 仁伺 |
| Citation | Osaka Literary Review. 1975, 14, p. 75-85 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/25670 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポー短編小説の一側面 (1)

松 阪 仁 伺

序

この小論は修論の一部であったものを、部分的に書き改めたものである。ポーには70余りの短編小説があり、さまざまな側面を持っている。ここでは、その一つをなすと考えられる、*William Wilson*, *The Tell-Tale Heart*, *The Black Cat*, *The Imp of the Perverse* について論じてみたい。ただし、紙面の関係上、本号においては、*William Wilson* のみを論じ、他の3品についてはこの雑誌の次号において述べる予定である。

上記の目的のために、最初に簡単なポーの批評史を述べ、ポー短編の問題点を探り、さらに各々の作品を論じ、さらに4つの作品全体についてまとめてみたい。

I. ポー短編小説の評価をめぐる

イギリス、アメリカにおけるポーと、大陸（特にフランス）におけるポーはその評価において全く異なっている。それには、ポーに対して積極的に非難の声をあげる、James, Huxley, Winters らの発言と、Baudelaire, Mallarmé, Valéry らのポーに対する熱烈な讃辞を比べてみれば一目瞭然である。ここでは、イギリス、アメリカ人の見るポー、フランス人の見るポーがいかなるものであるか、あるいはいかに違うかを考えてみたい。ポーは、イギリス、アメリカにおいては低い評価しか与えられていないが、その原因は次の2つに要約できるように思われる。

1. 文学観の相違

アメリカにおいてはホーソンの *The Scarlet Letter* がよく読まれているようにイギリス、アメリカにおいては、「人生のための芸術」という考え方が一般的であるが、これに対してポーは、「芸術のための芸術」主義の信奉者である。実際ポーはワーズワースは詩の目的を *instruction* と考えていると非難しているし、又ポーの批判されるのはその作品に道徳がないという点である。

2. ポーのimmaturity.

1.に關連してよく言われることは、ポーの文学は本質的に子供のためのものであって、成熟した大人が読むものではないという意見である。この点に關しては最も代表的と思われる Eliot のポー評をあげてみよう。

That Poe had a powerful intellect is undeniable: but it seems to me the intellect of a highly gifted young person before puberty. The forms which his lively curiosity takes are those in which a pre-adolescent mentality delights: wonders of nature and of mechanics and of the supernatural, cryptograms and cyphers, puzzles and labyrinths, mechanical chess-players and wild flights of speculation. The variety and ardour of his curiosity delight and dazzle; yet in the end the eccentricity and lack of coherence of his interests tire. There is just that lacking which gives dignity to the mature man: a consistent view of life.⁽¹⁾

この Eliot の非難はそれなりに妥当であろう。ポーという作家は基本的には現実世界を不条理のゆえをもって否定し去ろうとし、彼方の世界を夢みた作家である。現実世界とかかりわりを持つよりは、積極的にそれを避けようとしたのである。この点においてポーは、Eliot の言うごとく子供であつたし、子供に 'a consistent view of life' など持ちえようはずがない。しかし又、ポーが低い評価しか与えられなかった一因には、彼らが見逃したのもあつたのである。それを次に述べよう。

ポーの本質を最もよく理解したのは、フランスであり、Baudelaire であった。彼こそがイギリス、アメリカの批評家、読者の見出し得なかった

ものをポーの中に認めたのである。Baudelaire にとってポーとは、従来まで封をされていた次元の経験を文学に開いた、我々の心に潜む不気味なものを表現した作家であったのである。このゆえに彼はポーの文学を ‘new literature’ と呼んでいる。彼はポーの作品は心理小説として読まれるべきであることを強調した。これに対してイギリス、アメリカの読者はポーの作品は我々の現実の体験とは全く縁もゆかりもない単なる作事にすぎないと信じていた。ポーの恐怖小説は18世紀のそれと大差ないと信じていた。このような見方を否定してポーの中に心理性も見出したのが Baudelaire であった。ただ、残念なことに、彼はポーの心理性を指摘することはしたが、解明しようとはしなかった。それは後代の批評家に残された仕事であった。著名な人を下に少し挙げてみよう。

Marie Bonaparte は Freud の弟子でもあり、友人でもあった。彼女は著、*The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation* (原著、フランス語) において、ポーの生涯、作品の両方にわたって精密な研究をおこなっている。彼女はポーの生涯、作品両方の原型を小児時の強烈な oedipal complex に求めた。彼女によって、いままでその意味の糸口さえもつかめなかった諸作品が、見事に解明されている場合がある反面、その解釈があまりに単純、図式的でポーの真意を離れている場合もあるように思われる。上記の四作品についても彼女は解釈を試みているが十分に解明されたとは言いがたいように思われる。

Gaston Bachelard は、*L'eau et les rêves* において、ポーにおける水の意味を指摘した。又フランス語版の *Arthur Gordon Pym* の序において、この作品を読む時の、double-reading の必要性を述べた。つまり表面の記述の奥には、夢の世界からの底流のあることを指摘した。

又、フランス人ではないが、ロレンスも、*Studies in Classic American Literature* において、「アッシャ家の崩壊」、「リジイア」などにおける、ポーの愛の不毛を見抜いている。

このようにして Baudelaire の烟眼が見抜いたポーの心理性は徐々に明

らかになってきているとは言えるが、上に挙げた4つの作品については、その重要性にもかかわらず、論じられることの少ない作品であった。これらの作品は異常心理を扱ったものと言えるが、その中に共通のテーマが見い出されるように思われる。それが何かということは個々の作品を論じながら、最後にまとめた。

II *William Wilson*

この短編は2人の William Wilson の物語である。記述を簡単にするために、主人公であり語り手でもある Wilson を Wilson¹、もう1人の Wilson を Wilson²と書くことにする。話は Wilson¹がその生い立ちから、Wilson²を殺害するまでの経過を回想しながら、告白するという形式をとっているため、それにあわせて論をすすめることにする。

さて、Wilson のもっとも本質的な特徴はその巨大な意志である。つまり、他人の上に立ち、支配しようとする意志であり、自己の行動の主とならんとする意志である。彼はその幼児時代について次のように語る。

Thenceforward my voice was a household law; and at an age when few children have abandoned their leading-strings, I was left to the guidance of my own will, and became, in all but name, the master of my own actions.⁽²⁾

さらに最初の学校時代の彼は、仲間達の中の‘despot’であった。これから見るように彼のさまざまな災いのもとはこの意志なのである。この物語においてはこの意志が重要な役割を果たしているように思われる。William Wilsonは、Wil(l) i am Wil(l)’(s) son, つまり、Will I am Will’s son と読めるのではなかろうか。

さて、このような男は古代の専制君主にでもならないかぎり、その意志を阻む無数の障害にあうのは当然である。というのは、通常は気付かなくとも、少しふりかえて考えてみれば多くの制約が我々をとり囲んでいるのがわかる。盗みをしてはいけない。車でスピードを出しすぎではいけな

い。等々。そしてまたそれらがさまざまな形で我々の意志に圧力をかけているのがわかる。その最も基本的なものは法律であり、さらに又宗教、道徳である。それは人間が社会に存在するかぎり、不可避のものでもある。それが結局は我々の幸福のためになっていることは勿論であるが、そのために我々の意志が無理矢理にでも法律、道徳の方向に曲げられることは確かである。宗教に関して言えば、それはあまりポーの主人公の生き方に影響をもっていないように思われる。それはポーの場合に宗教的な *sin* が全くといっていい程あらわれず、その代りに社会的な *crime* が頻出することからも考えられる。

さて又法律や道徳は我々の外にのみ存在するものではなく、社会が存続するためには、我々の心の中に内面化されなければならないことは明らかである。それは幼年期から、我々の社会的に逸脱した行為をたしなめる、両親あるいは学校の先生によって、徐々になされると言える。さて、Wilson²は Wilson¹に対して社会的自我をあらわしていると言えよう。それはこの作品の冒頭の

What say of it? what say [of] CONSCIENCE grim,
That spectre in my path?⁽³⁾

あるいは作品の中の次のようなことばを見ても明らかであろう。

To the moralist it will be unnecessary to say, in addition, that Wilson and myself were the most inseparable of companions.⁽⁴⁾

社会的自我は良心とも言えよう。あるいは Marie Bonaparte のように精神分析学的に言えば、Wilson²は‘super-ego’であり‘id’ということである。

つまりこの Wilson の最初の学校時代について言えば、2人の Wilson の争いは結局、self-willed ego と社会的自我の葛藤と言える。これは我々にも共通の体験である。ただし、普通の人の場合には、この葛藤はそうたびたび生じるものではない。普通の場合には、我々はごく自然に行動すれば、それは社会にかなったものであり、葛藤など起こりえない。これに

反して、もし我々各人が自分の好尚や欲望に従い、また心の赴くままに振舞ってよく、他人のことなど眼中におかなくてよいと感じる。だがそういう気持ちが起ころが早いか、それに反対する力が現れる。それがとりもなおさず、社会的自我である。それは常に我々の意識にあるものではなく、その存在があらわになるのは何か反社会的な行為を決意した時に限られる。Wilson¹ 場合にはあまりにもその自己中心的な意志が強いため、その社会的自我 (Wilson²) が意識にのぼらざるを得ないのである。

この最初の学校における 2 人の争い、あるいは Wilson² の Wilson¹ への意志への干渉は上に述べた意味を持っているように思われる。Wilson² は咽の器官に悪いところがあって、そのためにささやき声しか出せないが、これはまさに人間が反社会的な行動を起こさんとする時の良心の声ではなからうか。さていままでの議論はごく常識的なものであって、Wilson² が社会的自我であることが明白なため当然のことであるが、問題はこれ以後である。やがて、Wilson² に恐れをなした主人公は夜中に彼を残して学校を去り、イートン、さらに Oxford の学生になるが、Wilson² はもはや常に Wilson¹ の近くに存在するというわけではなく、その現われるのは Wilson¹ の悪行が頂点に達した時だけに限られている。この変化に注目している批評家はいないように思われるがここにこそこの奇妙な物語を解く鍵があるのではないかとと思われる。以後それについて述べる。

やがて、Wilson¹ はイートンの学生になるが、彼は滅茶苦茶な放蕩にふける。Wilson² も同じ日に学校を去るのではあるが、今度はイートンにはあらわれない。彼の悪行はここから始まるといってよい。勿論、もはや社会的自我につきまといわれないのであるから当然のことではあるが。しかし、ある夜突然 Wilson² が現われて警告する。

さらに Oxford おいては、遂に Wilson¹ はトランプの詐欺師になりさがってしまう。彼はある夜トランプのゲームで如何様で、成り上り者の貴族、Glendinning から莫大な金をまきあげて破滅させてしまう。まさにその時に突然の闖入者が出現する。それは彼の分身であり、如何様をあば

いてしまう。

‘Gentlemen,’ he said in a low, distinct, and never-to-be-forgotten *whisper* which thrilled to the very marrow of my bones, ‘Gentlemen, I make no apology for this behaviour, because in thus behaving, I am but fulfilling a duty. You are, beyond doubt, uninformed of the true character of the person who has to-night won at *écarté* a large sum of money from Lord Glendinning. I will therefore put you upon an expeditious and decisive plan of obtaining this very necessary information. Please to examine, at your leisure, the inner linings of the cuff of his left sleeve, and the several little packages which may be found in the somewhat capacious pockets of his embroidered morning wrapper.’⁽⁵⁾

さてこれらの2つの場面はどのように解釈すべきであろうか。上で述べたように Wilson¹ は self-willed ego を Wilson² は社会的自我をそれぞれあらわす。それゆえにこれら2人の Wilson は1人の人間の2つの側面をあらわしていると解さなければならない。そうであるとすれば、これら2人の人物のどちらでもない、2人を統合した所に存在する人物を考えなければならない。この人物を単に、Wilson という名でよぶことにしよう。そうだとするとイートンでの場面は Wilson が突然に良心の声に目覚めたと解釈できる。又、Oxford での場面は Wilson 自身がその罪を告白したと考えられる。あるいはもっと正確に言えば Wilson¹ が突然 Wilson² に変わってしまったのである。この解釈は一見奇妙なものに思われるがこれ以外には解釈の仕方がないのではなからうか。ただしこの解釈を補強する証拠を挙げれば、他の作品にも同様な現象が見られる。つまり *The Tell-Tale Heart* においても、*The Imp of the Perverse* においても、人殺しをした主人公たちは発作に襲われる如く、我知らずにあるいはその意志に反して罪の自白をしてしまう。その告白の瞬間には彼らは全く人が変わってしまったかのようである。この William Wilson の Oxford での場面はこれと全く同じ現象であると考えられる。ただ違いは、William Wilson の場合には、2人の人物を通して描かれているということである。しかし何故にこのような現象が起きるのか、私の解釈を述べたいと思

う。

さて上で見たように Wilson¹ はその社会的自我 (Wilson²) と事あるごとに争い、憎んでいた。さてこの葛藤というのは我々に共通した体験である。それが起こるのは人間が選択できるという能力を持っているためと思われる。ことある度に、未来の行動に対して選択できるのは、理性を持つ人間の特権である。動物の場合には、すべての行動にわたって、盲目的な本能が支配しているように思われる。刺激に対して反応する場合、その反応はあらかじめ規定されていて個々の動物が選択する余地など無いように思われる。これに反して人間は過去の体験をもとにして、未来につながるいくつかの道から一つを選択できる特権をもっている。しかしこの選択の自由は特権であると同時に、重荷になることも確かである。音楽会へ行こうか、映画に行こうか、あるいは授業をうけようか遊びに行こうかなどという選択は比較的簡単であるがそうでない場合もある。2つの道のうち必ず一つを選ばなければならないが、その両方ともが好ましくない結果につながりそうな場合である。例えば、よく言われる義理と人情の板ばさみである。人間は選択する能力があるためにこのようなディレンマに陥ることも度々である。そして又それは時には非常な苦悩を生み出す。さて統一体として見た時の William Wilson なる人物も似たようなディレンマに陥っている。つまり彼の内部には2つの行動の基準、本能的で反社会的な自我 (Wilson¹) と社会的自我 (Wilson²)、を持っている。そして又その本能的自我が強すぎるためである。というのは社会において幸福にならんとすれば社会的自我に従うことが絶対に必要条件であるが彼にはそれができないからである。そして又彼はこの幸福を必要としない人間でもない。つまり本能的自我に従って行動すればこの幸福を断念せざるをえないし、又社会的自我に従って行動することは彼にとっては困難なのである。これも一つのディレンマであろう。この苦しみをあらわしているのが最初の学校時代の2人の争いであろう。やがて彼はこの苦しみを解決しようとするのであるが、そのことについて述べる前にもう少しこの本能的自我と社会

的自我について考えてみたい。

この2つの自我は統一体としての人間に、それぞれが同じ価値を持っているわけではない。少しふりかえって考えてみれば、我々の場合には彼と全く逆であることがわかる。我々の場合には社会的自我が本能的自我を完全に統制している。我々には、小さい時からの教育によって社会的自我の方がずっと好ましいのである。我々は積極的に自分自身を社会的自我と同一視しようとする。というのは我々の社会においては本能的自我は何か罪悪めいたものとして抑圧されざるをえないからである。そして又それが、つまり社会的自我に身を委せることが、我々がよほど強い信念を持っていないかぎり、我々の幸福につながっている。ところが、Wilsonの場合にはこの2つの自我の間の主従関係は全く逆である。彼の場合には本能的自我が中心であって、社会的自我はその邪魔者なのである。Wilson¹がこの物語の主人公であるのもそのためである。それも、最初に述べたようにその意志があまりに強すぎるからである。しかしこのような反社会的な人間が幸福になれるチャンスはほとんど無いといえる。

さてこの Wilson の苦しみは、Wilson¹ が酒、女というような肉体的な快楽を追うのに対して Wilson² はそれを禁じるように、身体的自我と精神的自我の分裂の苦しみとも言えるかもしれない。この2つの自我が分裂して全くバランスがとれないのである。

さてとにかく Wilson にとって一番の問題は2つの自我の間に生ずる苦しみを避けることである。そして彼はこれを解決するため自分の内から社会的自我を切り捨ててしまおうとする。あるいはそれを無視しようとする。これも常人の場合とは逆である。常人の場合にはその本能的自我を抑圧してこの葛藤、あるいは分裂を回避しようとするのが普通である。イートン以後においては Wilson² は時々しか現われない。それはこのような意味を持っているのである。つまり彼は図で示せば次のことをするのである。



そしてこのことが Wilson にとっては自己の統一をそこなわない唯一の方法である。しかし問題は、常人にとってあまりにその本能的自我を抑圧することが不自然であるように、このようなことは自然であろうか。確かに人間はその前に目標をおくことによって、徐々に自分の理想とする姿に変われるということは確かであるが、それにも限界があろう。Wilson の場合には図で言えば右側は彼の現実とはなり得ない理想の姿なのである。ところが、Wilson はこのなり得ない姿になってしまう。

あるいはもっと正確に言えばなつたと信じているのである。彼はこの点で仮の姿を演じる役者に似ている。どちらも自分でないものになってしまっている。ただ本質的な違いは役者は演じているという意識がありやがて本当の自分にもどるのであるが、Wilson の場合にはそれが無いのである。

彼は Oxford での如何様をする場面、あるいは最後のイタリアの貴族の妻を誘惑する場面においても、何らの罪の意識を感じていないように見える。それは彼の意識の中では、現実には成立するはずのない、 $Wilson = Wilson - Wilson^2 = Wilson^1$ なる等式が成立しているためである。この物語が複雑になるのは、まさに Wilson においてこの等式が成立した形で $Wilson^1$ の視点で描かれているためである。しかし実際にはそうでないことは Eton、Oxford の $Wilson^2$ の出現に見ることが出来る。そののち大陸に渡った Wilson は、

I fled in vain. My evil destiny pursued me as if in exultation, and proved, indeed, that the exercise of its mysterious dominion had as yet only begun. Scarcely had I set foot in Paris ere I had fresh evidence of the detestable interest taken by this Wilson in my concerns.⁽⁶⁾

と語る。彼の逃走の旅はまさにのがれることのできない、社会的自我あるいは本当の自分から逃げようとする旅なのである。

この Wilson の中に明瞭に self-alienation という現象を見い出すことができる。alienation というのは Hegel が使い始めた言葉であるが、その後多くは哲学者、心理学者がさまざまな意味で使っているために非常に

曖昧な概念となっている。ここでは、この言葉の歴史を丹念に研究した Richard Schacht の *Alienation* 中の Karen Horney の self-alienation という概念がこの William Wilson にあてはまる。彼女の self-alienation の概念の内容は次のようにいえよう。

self-alienated された人物というのは、自分が本当に感じたり、好んだり、信じたりすること、つまり本当の自己 (what he really is) を忘れてしまった人である (oblivious)。あるいは本来の自己 (his real self) を見失ってしまった人のことである。その原因として彼女は、the idealized image をあげている。それは現実の本当の自己からははるかに異なったものであり、そして人が自分はこの the idealized image どうりの人物であるという確信を持つ時に、自己疎外なる現象がおこるといっている。

Wilson が自己を見失った人間であるというのは Oxford での場面を見れば明らかであろう。彼の場合には本当の自分というのは上の図の左側であり、the idealized image は右側である。

注

- (1) Eric W. Carlson (ed.), *The Recognition of Edgar Allan Poe* (The University of Michigan Press), pp. 212-3.
- (2) Edgar Allan Poe, *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe* (New York: The Modern Library, 1938), p. 627.
- (3) Ibid., p. 626.
- (4) Ibid., p. 631.
- (5) Ibid., pp. 637—8.
- (6) Ibid., p. 639.